土佐物語

自五
至六

三

和書門 類
二五の七七 號
九五 函
一三 架
一五 冊

内閣文庫
和書 類
二五〇七七 號
一九 冊
一五 函
一一三 架
（三 才）

内閣文庫	
番號	和 25077
冊數	15(3)
函號	151 127

土佐物語巻第五目録

瑞應寺建立付豫岳寺乃事
元親縁邊の事
秦泉寺并白岩夜討乃事
馬の上乃番人狼藉の事
吉田伊賀助妻女乃事
一條殿御簾中離別乃事
一條殿諸将合戦の事
江村小備後帰陣并五倫切の事

土佐物語 五六

明治十年謄寫

土佐物語巻第五目録

瑞應寺建立付豫岳寺乃事
元親縁邊の事
秦泉寺并白岩夜討乃事
馬の上乃番人狼藉の事
吉田伊賀助妻女乃事
一條殿御簾中乃離別乃事
一條殿豫州合戰の事
江村小備後帰陣并五倫切の事

明治十年謄寫

安喜より幡多へ加勢之事
峯寺観音縁起付国虎元親和談の事
安喜国虎を責る事

土佐物語巻第五

瑞應寺建立付豫岳寺乃事

長宗我部元親老臣を呼て申されけるハ亡父覚世の送葬ハ営ミ雖之悲歎いまた乾かさるに以てと供仏施法の勤も如く軍門に隙なき事　乱の時といへとも以て和平の歎なきにもあらす但し今天運に付て土佐吾川南郡南分悉く我手に属し吉良朝倉を討取亡魂の鬱憤をもはらし事生前の本望何事か是にしかんや付てハ仏事供養をもいとなミ追善をも営ませんとて鎌倉寺を再興し父母の追善を

奇なるやと抑もこハ以ゆまし宜之ハ年来り冠婚葬
祭を礼の大事と称して改へり齊家治國の大本なれハ
急ぎ四国に出すへし中にも元親は此功多す
甚後にいたり宣め人大工を称し大工小工を集め小谷の地形
を平にし石木を刻み丹青を飾り珠玉をちりばめ
月を経日月を積て落成しけれハ寛鵝絵として卒く
堂を儀飾して新に造る又瑞應覚世大居士吉安
公を祥鳳玄陽大姉の菩提寺なれバとて千歳山禅
庵寺にておはる寺め祥鳳山瑞應寺と号して千石の
田地を寄せられ八家臣の食に四百石の地を司堂

田と称して寄進し月々の祭奠朔望の勤行怠
りなく仏法繁昌の一霊地となりけれハ二親菩提とて
高才有識の法僧也(行カ)甚生国ハ土佐にて弘治三年丁
巳七月同国望雲寺の輪番を勤(於)て四国順礼の為
四国へ渡り同国の境内のまゝ酒りなりける處に何
波塚とて同国の東に古墳あり是ハ往昔当国豊永の
領主何某とかや南所に貴寺ありしか南山八幡大
菩薩の御像の瑞験あらて敵を悉く討亡ほし殺を
土中に埋めありしと云伝へ越年彼塚夜々鳴動せ
る事数ヶ月を積て止まりけれハ男女怖怖て平

斜ならす庵の主般若経に向てよミのあり法力を以
静めなかりせハ此所ハ安き径の事にしとて般若経に
行一偈を書て主ぬれハ見聞より息に明り止ミけり
翌日旅宿を立出んとしけるに亭主へハ主し又明寺の事とも
旅の人急き留りけれハ吾急く旅にあらすとて一七
日逗留ありけれハ再し此明寺の事ありけれハ子細
あつけとて庵を立出るに覚無の道へ行けれハ
相様の活僧を見て顔ひしにそれハ何方へとゆかるる
そ様の御一新そこを御らせて拝へしとゆけれハ急き
呼とめせとて人を追りさせけるに吉川郡贄寺川
まて追つき伴ひて帰りけるか覚無を以て収入封面至
て先山田氏嫁岳山寺に移りてなかをるし且つへけ付嫁
岳寺と申ハ天正二年丙戌雪山和尚の開基なり山田
小總守大井氏元追付寄進あて嫁岳常悦と識し
在善提の為に一字の伽藍を建立し嫁岳寺と号
山田氏代々の位牌所とし曹洞宗越前国永平寺の
末流なり長門国瑞雲寺の掲藩をきめ来せり雪山
雪心和尚より通安和尚まて十二代とそ覚ゆへし此寺の
境内に薬師堂あり当寺の本尊にて通安之弟の時不思
議の霊夢を蒙り洛陽因幡薬師を写留して本尊

しける所に安置し因幡堂と云る故新仏とあらハれける

ゝ也去程に元親ハ雪蹊寺を再興し通安和尚を住

僧とせんとなされハ老僧とも申様ハ雪蹊寺ハ禰岳寺

の末寺にて彼地ちかくり末寺へ移り然るへしとも申けれハ雪

蹊寺に於て禰岳寺を支配せさるへしと仰けれハ是ハ

望成かたき由申ければ彼と一緒にて定りける所て

通安和尚を開山として瑞応寺に住せしめ然て瑞応

寺の住持禰岳寺を支配せしむへし其後天正年

中元親居城を大高坂へ移されし時此通寺をハ土佐

郡石立村といふ所に移し瑞応寺ハ同郡大高坂の小振り

ら高洞寺山にうつし造営あり其後又浦戸へ移されける

されて此寺もまた別に移るにて極りけるに元親帰依

ありて極楽に至る其親類と三ヶ国皆りてその下に並ける

となり候也

元親隠遁の事

永禄六年の夏元親家老の面々を集めて我既に

二十五歳に及びけり妻女を求めんと思ふハ所々に

定めハ家老共承り是ハ目出度る思召候家門繁昌下

民安泰に社稷に守られせられて候ハんと申けれハ元親

美濃国稲葉伊予守か孫斎藤内蔵助か息女

を要とするやと思ひしに宜べハ寡ニ而も能と風情に
て皆く閑口の所に中島大和様にて申候ニハ遠思より
御縁辺深き御方曾而御引後に西国筋ニ及ぶ阿
讃豫の三国ニ大名様を数多御子孫是迄と仰る縁
者は盛ミ也是自然の時ニ御身方に積まて世可ある哉
一 近国を閑る也遠境の御縁組に而其ニ御喜色
の御筆御座開口ならも強ひて乃今年かり戦国の
節とは遠国と云へ世上乃人皆々ハ御思継ます
りしも中にも夫ハ元親可然中処理る也るかりて天
我地祇ニ誓て今ニ彼是女子容色の所は無ひ然

ハ女子より者ハ色ハ免るれ角さるれ祖父伊予守豊
後守武名から一しき者也ハ被腹子出生の子祖父ニ
あやかりべしと思ひまへらせし 昔和田義盛木曽義仲の
妻となへる嫁しても色を好む事あらバ彼も勇を
望みて朝比奈三郎と云天下無双の勇者を産り待
ま遺しけれ而但夫ハ武勇を目の逢り見ての事
なりしの母ニ色てもさる女子なるへからず労ハしと也よ
なるべし正主の御名へ其縁なし唯御祖の武勇を
慕ふ者ハ遠国なりと縁るに成るへきにもあらんと宜
ハ所其色大ニ感嘆して本時武将の器也と不図

内務省

と称しけり斯て吉田右衛門佐と改名ありして濃州へ
趣かれハ豊後守も伊豫守も大に悦び存謀ありて
吉田と拝して織礼をなしけり政吉子三人あり長
子ハ名谷多部少輔生涯ハ為庚田龍政治後に利
三と改む二ハ女子之親の叫乃母是なり田舎助子も三
人あり嫡子ハ明知弥次郎の道玄本二男ハ為庚土庵
右衛門三ハ女子稲葉担右衛門に嫁し後に台徳院殿
秀忠公の御乳母春日の局是也されハ兄土庵右衛門
も召出され与三右衛門と改乃稲本の数に加へ土庵も為
めされ御坐入しかるに元親子役なりとあり第一女子一

内務省

隆左中将内政朝臣乃室第二弥三郎信親第三女
子吉良左京亮親実妻第四香川五郎次郎親和第
五ハ津野孫次郎親忠第六女子佐竹蔵人妻第七右
衛門太郎盛親是ハ女子吉松十右衛門妻是ハ政吉
娘の腹なり第九右近某第十女子小宰相と号して
是ハ小少将といふ女房の腹にて出生より家門の総領
以定りけるなり

秦泉寺并白石夜討の事

吉良式部少輔ハ領家に帰へりして其山へ引退き
出けれは是にし八晩日よりて朝倉へ追従仕学問

内務省

豈に臆病なる事斜ならん中内紀今井左馬助大
黒与七兵衛横矢ら一族皆降参して種田岩吉是
ハ白岩の城をかためて東山へさしまゐりけるか是ハ岡豊小
ハ春雷敷を発する勇をなせしハ東山にハ盤居の里氏
をなせり中島新助中々日ハ只何の如くにてハ味方
見之に隙間を臆病なる者行てひらり首傷に鋒死せ
しけり夫武士ハ戦ふへき處を戦ハすして身を惜む
を以て恥とせし東山の者ら敵を恐れて退避す
逃かれて頭をたれさる事のなかりしさよて談人
を笑ふ其人事ぞとはなし何れハ世を死にして命を唯

らきまでと居て徒らに死残の生をうる事哉且ハ去甲
斐家なし且ハ武士の本意にあらずとて敵地に入民家
を焼払ひ或ハ乱妨し所責ニ参りして漸々に岡豊
へ攻のぼりしと取りけれハ張本皆此度ニ用して究竟
の兵を揃へて一手ハ中島新助宮(?)高内与七森先六郎
次郎を大将として兵乱(?)より一宮へ向ふ一手ハ岡崎
与右衛門随身左内葉川之助を大将として白岩より
今井大利通を放火せしと相図を定めて
乃山坂を渡せさる方へ働向ひけり時ハ五月五日の夜なれハ
月ハ曾より入りけり時刻よくなりぬとて二百余人兵乱

内務省
内務省
国立公文書館 National Archives of Japan

野の坂をかゝりて一宮の在家に火をかけゝれハ魔風盛
になりて民家捜るゝ猛火通り寺畑四方に廣りて
西御前東御前三所若宮五十八ヶ所稲女社七所王子天
神社宝殿惠法使社弁財天津守若王子乃急社大宮二
王堂護摩堂鐘楼堂三昧蔵経蔵国司屋天上屋廰屋
経所井屋東西婦門一ノ鳥居二ノ鳥居三ノ鳥居三重
塔社僧社人神子の居所悉く一時に灰燼となりし事
偏に蒼天にまかせて浅猿かりし事とも也それより
大明神の御社をかりて残らすもえあかりて和田義盛
御山の軍兵ともに一宮を焼落しけれハ[illegible]

寺の在家へこちら入老若男女をいはくハ捜切にて
捜ニ三百人打取り秦泉寺大和守是を聞て
先陣へ敵に要撃に逃されしと云事やある随身
と手勢ハ千引具して押よせ左へ追かけまわり御山
勢山の城をさして返す今も火をかけ枝をさしたる大
和守自ら火を放ちて切りかゝる兵もらし所に森御
六郎次郎眞先に進んでかけの門を破り西方へ打ける
翫きと引て大山和を焼より打返したれハ御山勢方雑か
く三谷を越てを引たりを劉て一手の本山勢是を白
し又五百の兵より吉良白岩に家より夜更て近く

押の乱妨狼藉せんと議しける処に神心の者ありて方
便の理窮なきにあまりけるに今井右馬助に告知らせけり今井
聞て一旗翻して駈廻し今井兵部右衛門同三郎左衛
門外近辺の軍勢を催し敵の後へまはりける右山勢
八夢にも知らで休み居けり夕陽山にかかるころ大勢に
及び後より来るを見て味方の油断をなげき如何はせ
んと驚き騒ぎけるを一目に大菊に陣して居ける処を
大勢吐と周を取て押寄せけり右山勢御天して
錯よ太刀よと周章ふためく処を難なく磔にかけ破
里近浩廻し切伏突伏乱戦なりし一人も多く変

剱先きを前後を見失ひ逃散りける恥をも思ひ名をも惜む
輩の有る者に相へ思ひし合ありて呼はりて再び子を守る
の尽さんとて成ん者あり手の力及ばて見〔猛将〕鏡章を右山
まて引取りける

馬ノ上城番人根藉乃事

安喜郡安喜鄕は安喜備後守藉我國府に藉安亦
元大臣の末裔なり元暦の古へ平家滅亡の時伊勢守
数経て但て入部せし安喜太郎備後也代々数十代この
所を領して繁栄せしめ当方を守りしに永禄六
年の秋不意の小事より事起て同十二年の秋安喜の

家臣ひろうこえしこえたれハ其後長曽我部元親ハ中
郡大黒討随ひ幡ひ日に増月に盛んなり素より秦
家興立の志ありけれハ幡多安藝両郡をも随ひ度
思ひけれ共さすか幡多ハ身に恩ある主君也安藝ハ一條殿
乃縁者なり同根一枝なれハ天の恐れも如何と控へけるに又ハ中
郡まても悪しく治らさりけれハ先其国を整て外を
伺んと如何せんとおもひけるに甚色なく在て音信通路を絶て
慎る事もなかりしに不意に乱れ来りたる匠鹽鰺
を尋れハ千丈の堤も蟻の穴より起り大廈の傾き
覆るも一礎より始るとかや安藝郡和食の浦に入金

岡馬ノ上より二ツ城あり是安藝よりの出岩にて
香美郡乃境なれハ用心の為ニ數千人の士を
籠置番手に替てまもらせけるか或時馬の上の番
若士申けるハ香美郡長岡土佐吾川の辺ハ悉く我の城
攻破ての戦ひありしと云て慰みけるを聞て長宗我部殿
ハ唯手に合ぬ計の者を侮て出るとのみ云けり両
郡ハ今盛なれハ手を出す事もなく我慢しておるし
兼なりて元親此等を聞しとてそれよりしまき
慰なりしと云けれハ又一人進ミ出て此者ニおゐて程頼に
となり宮内少輔ハ兼て好ミ推河数して眠りを覚

けゑてみせよとて云けれハ芸なりとて腕押膝押首引
目網引盤持花合こなとして日を暮し夜を明し
けるも又始の囲の云けるハ日々無事用遊ひなれハ事
なりて面白からん手を習て遊ハんと云けれハきるハ
何をかなりて遊ハんとあらぬ事をとかく企ける一人
進ミ出て寛勇の事政思ひ出すり今ハ藁多き時
節なりしが民の国ハ理を尽して推のてときへし
事ともめて勝書乃上魁をとらせと云へし又強て
勢なきなりハ一番あてゝ刀をかさ取へしと云けれハ是ぞ
道なる事なりとて一番二番の闘取して東西南北の

手分なして役所をハ打捨おゐて一番に残し毎方へ
へ三疋づゝの宝物世倍乃證に埋越の馬一疋づゝハ
千匹の馬越かとハ如何なる事なるやらん人乃国に押入
累獅なとを取られハ事ぞ是を見て何者か狼藉
なりと棒ちぎり地に突て向へとも是非もなく神妙にて居
けり乃か亭主もあきれあきれて押進み入なれハこの
翔をハしかすそと問けれハ是ハ馬の上総番の大将
魁の格子事なりとて打笑て居けり乃か亭主ハ腹立て
始まり乃おの家来共ハ思外なりしかど七をて主手乃
免お有て乃心中のまゝ乃魁共へと鬚整に述て侮り

内務省
内務省

さら和の総ハかやうなる金穀を費つるを厭ふとあり
樹木楽園を荒しけれハ心へなき腹を立れとも是
さわかしもてあつかひて居けりけるか金岡の番人
これを所て若き者ともこれハ面白からん何まても珍
らしき遊ひをせんと云けれハ一座中にて老人ともいや
此や無用之我こ好きの役ましと云老人ハを番難き
いさんらしハかやうなれ時乃猶も全くなきにも備え
る事ハなくんハ見もし馬ノ上乃禍近日にあり
一ツ油断ハ大敵懐しへしとて制しけるか若手共笑
ひして孔子なとさ見所処にてハ何をかいうても面白

からし詮なき処傘亭か流を汲て登場せんにハ
あらしとて互に噂きも笑ひけるか爰に香美郡大忍の
庄夜須と云所あり是ハ吉田大備後重俊か培地
なり此庄ハ甚た安藝に属しけるか近年ハ岡豊の
領となりけれハ元親の下知として安藝の境なれハとて
て大備後ハ夜須の城に移住て此城を大杉か城
と云其外ニ大杉鍬鐘か森尾か森とて三ケ城を構へ
て居けり然る馬ノ上の隠世者の者共の祈り近在
を立廻りけるか知行にて取へき菜草ともなくなりけれ
ハ私領他領の隔迄もなし四方を廻りけるか

内務省
内務省
国立公文書館
National Archives of Japan

夜須のごとく押のて倒のごとく人の國乃柳の末を足
非なく押倒してこそみれハ是を足を以て云ふ大膽
乃盗賊道を知らと大音あげておめきしかバ
又女神を捕りけるを呼ひし膽を三 隣家
の友を呼集め大勢一度にかゝりより押さへて縄をかけ
掛けるを盗賊は肝を潰し暫くハ馬の上の番人
なりし稼ぎての咄なりしと始終を申しけり之を
より何者ぞと問せよ盗賊すなハち盗人よりも恐て引き
吉田に於て申けるは大膽なる者は禍ハ小より起る
といふ国虎知る処に於て以来是の者なれバとて若士

一人の家来ある私領に於て推へ不義を働き村の
民ともこれを捕へ家来を引せ進りけるに若此方の小郎
等に領に於て不義をなせしを以て召捕ひしを
も懸勤せしか中にも國虎は吉田が領へ狼藉し
たる者也とて搦捕て百銭を給ふ甚吉田ハ云ふもの昔ハ
党をなせし者にて今は親が家臣也礼義を存
せぬ愚者が其様の方へ来て百銭を給ひ國虎に直
に彼者の家来は彼が下部をして此方へ来て不義
あるは召捕へしよし家来は緩怠の道なり礼を正し因
人にもとて引寄せ子細を尋ねしに始終を申しける

国中若き者とも徒然のあまりにハあらぬ事なとも
せしもの有にあらん是ハ窃盗強盗の類にも非す
夫とても彼の節にて縄を解てそゆるされける彼殺害せ
込者ハ此方に及ひまして急き立留ら吉田子か
之を申付る吉田か倅子伊賀助ニて（一本ナシ）女男にて討を稍
つきぬるのみ手の内のみしもる事此世迄さもと成上ハ馬
乃上ニ申候を窃捕事望をを遂せんと究竟の者共二十
三人隔し立先一人百姓の躰に作り馬の口を走らし
案内を留置け番の者共ハ安穏よりの然とも気を落し
見られ之強盗をも承し遠近に打廻し出ありし女

悪事をなしける所に及ひ彼百姓ともハ番の
者四五人残り居て昼寝して居りけるか何者をも（此者を見て）
然とも彼者共足ハ和合村の孫之助と申者にて
或番所の同番人と偽り是を召捕残銭を求め
兼樹木を荒され迷惑いたし候重て右様の悪ふし
みな申さは此等の者共雑立候ハんと謹て申候
番の土地にあらす又大宮にしていつまても理ある事
国の名物と云ふ御所の物と云和食羅蔔持参せよ
と返事もなし取来候者共と云ふハ彼の者とも
其安き事に候へハ近日大根等を差遣し候探させ

内務省

驄駐原作
驄駒恐
駐駒又
駘駒之訛

頼とおもふて立帰り此由を告けれハ伊賀助悦び
走先キにと押寄る番の者ハ人音を聞て又只人ならぬ大
勢来れりと覚へしより捕ふ以へそと出合ふ者なくして高騒
騒ケるを以てそ卽ち門ハ吉田か勢一度に吐し押入ハ番の者
折ふしさてハ此りける起あかりしんとする処を起すもあらせ
一人も逃さす（捕）召取吉田か家の三口引両の旌押立
開の都をさして上りける二十四人の声あはせと山崎にて
たへ敵西殊の声をきて聞へける方に立越へて溢れ出
とよ大声きく立帰りしと（止）いひしハ吉田か旗をもち
上ケ大勢きて見へけれハ徒方をつし右往左往す

旅行けり坐國にハ是を聞て老人とさへなれハこそ
此る女事なりとて中にも国康此由を聞いて大きに都を
みまさ吉田めに謀られぬるこそ口惜しけれ然て取返し
甚意を晴らさんとて急ぎはせける何者の志かさ
おや皆之人一首の歌を高札に書て安積の町に
そ建たりける
伊賀の助ハ其れを追しつつて馬のうへ唯一さんに家
をさしてかけり（此以下別行ニ）頓て伊賀助ハ直に馬の上より飛降して塁
を高く塹を深くして固く守りて見へたりける

吉田伊賀助妻女の事

去程に元親ハ本山へ大勢を指向ひ日々夜々時
の声鉄砲の音鳴り止む隙なし然に攻寄て押寄
打入て切合利を得て進む時も首討取て退く時も首
取に雌雄なかりけれは以つ軍とも見えさり
けり吉田伊賀助も寄手の一散にて本山へ入て向ひ
ける新手の処に道し渡る人々の城を焼けし者
の有とも甲冑の折から何方と百四五十騎掛催し
寄ハ其を押しよせる折しも伊賀助か妻女ハ女房
とも集を集め四方山の物語りなとしてありけるか雑兵二

三四五計なる女の童何心なく椽に出て遠見
し居たりけるか大勢寄来るを見て大に驚き敵寄
来りぬと大声上て申けれは伊賀助か妻女少しも騒
かす立出見廻して以の外に敵城へ取掛るを見返
さんとて帰りに留守の侍を聞ひ寄手も見えさり
さらハ此方より用こそせよとて城中の女ともを何集て
女房ともに[illegible]しい[illegible]を以て甲冑を着て部の男ともそ
なる侍あつめ小[illegible]をなして頭に甲を着せ自身も甲を
持て帰の太刀を差し或ハ左右に鎗長刀を持せ常も有
前後に印を差も有
大旗小旗なと木の枝塀柱に結付て大勢籠りたる

神にて見せられける宗任の首是を見て安からず
速やかにたりけれ皆々推察しけるかさりとて神にて
誠へは寄せしかども西の方へ打通りむかて安然と立返
しける一朝の露にて虎口の難を逃れ夫の名を
挙けるかその頃何者かよみけん

こちらこそ馬の上人はやすやすと無事と得退
て歩（カチ）ていまもかへり（此以下別行ニ）上下男女皆此歌を口すさみけれは国中悉て
平眼病者とてこれを見て首を垂れて宜へなる
到て伊賀助は和泉常世を頼みける和泉の永松
寺といふ寺は伊賀助か菩提寺なり

一條殿御簾中の離別の事

一條殿黄門兼定卿は去る永禄元年戊午伊与国
宇津宮泉か娘をむかへられ一度夫婦の
百の婚ありけるか猿優にやさしくかれし二条
の松の手をつけてかれは色を顧みて淡かふ故帝
に二男一女出来させまひけれは之備老の宮のたゞ
たらひあはせまひに宣めなる世の習ひ月にむら雲
花に風いかなる事か出来にけん黄門ふと心に叶はす
事ありとて俄に離縁ありしよしかくれは安
土居宗三大まへに却りき兼定卿の前に出て涙

なされて中将殿ハつねに御所存のまゝ相成り於若
君姫君迄ハ以の外思召被成御且ハ夢之義其
御身にも及ぶと詞を尽し理を責て諫め申せ共
を更子取引あはし中ニも同七年甲子終ニ送
返ニ成り連理之枝比翼を友として子
達を挫きの御心のまゝを以前り申き後獨之
豊後國大友宗麟入道の息女を初め数多の容色
無双の美人ゟあれこれ御寵愛浅からず去れハ此取る
をせし日夜々を先の御簾中を出しけれハせ
ありけん移り安き人心頼みにも御志なれ共又此

溺を以てあまたのおんなを集めんと呼ぶ女房の家
ふさわり昼ハ昼日遊宴を事として國の慶
をも久くり男を捜ハ猥舞を嗜て世す政を
以ての外天理に背き人法ニも違ひ大義にも慶
せて一門一家羨む事浅猿のみ

一條殿縁ゟ合戦の事

入腸胃處則外邪易侵國政則盗賊易起頃は嶋
多ゟ村の邪風惜り下怨て天地否たあるりしハ豫州
宇和郡の溺せ安房このた村まで何がしん一揆を
催し幡多の山々里々おゐて乱妨狼藉是のミ

内務省

あるひハ同國の所々島々の賊船ども博多の浦々ニ押
寄せ家々を焼拂ひ追捕しけれバ浦里の男女
物恐をし四方へ逃隠れて博多ハ民家も里も無き
なり一年敵此由を聞て呂郷の原に辺境を侵入して
人民騒ぎさわぐ事にて安からぬ私急を聞て狼藉
を静めんとて軍勢を率ち國へ差向ける同心法華
津播磨守則延を始め味方ニ志ありけれバ打て出
加りて宇和島の先ニ押入て當代迄し麦薙刈田乱
妨放火して彼是戦ひ度々せり合老若男女を捜せ
に攫切して西國寺社方迄公廣か属城三ヶ所

攻とりけれバ公廣聞て安からぬ事なりとて三ヶ所を
取返し直ニ土州へ責入へしと軍勢を駈催し
黒瀬の城を出て馳向ふ土佐勢是を八幡まで迎
に三ヶ城を輙く乗取郷々へ立入皆逃散て手向ふ者
あらざれバ土佐勢思ふまゝ足下にふみ思ひ侮て城ニ
ハ土田要害ニ老人小部者を残し置富家ニ入てハ
押取し酒盛ニ入てハ数盃を傾け狼藉甚し公廣此
由聞て忽ち軍勢を三手ニ分旗を巻て打ち静り
返りて土佐勢を三方より取巻し一同ニ鬨を作り
て押寄れバ土佐勢おどろきさわぎ敵のよせ来るを

馬より抱の奥よりひしめきし所へ公麾真先に進て喚て
かけ入七縦に追廻し八縦に打破り掛廻り引かへし
無法無礙に揉立て討たる者数をしらす希有
して逃延たる者ハ皆鎧腹巻太刀弓鉄炮を打捨
て赤裸に身命をたすかり逃去て追て去る逃延る
見ゑ手した倶勢に討取り二ケ所の城の者共是を
出て叶ふへしと思ひけん敵未た寄せさる先に城
を明て落行けれハ公麾ハ三ケ城を取返し
勢に乗て田中を打離け近々土肥ハ越中の
城を責取んとて陣をすゝめ一条殿ハ軍を起し

のこす所無き之成る城を取返され天下の人口に
爲めの事生涯の恥辱と思召けれハ自身打向
ひ雌雄を一戦に決せんと岡豊へ御旗を加勢を
乞ひ光ハ元親ハ江村小備後を大将として五百余
騎差添大友義鎮の遺家臣ハ本国を極め豊後
の臼杵を立て豫州へ向ける兼定ハ法華津播磨守
と謀し宿毛に至り年余の中ゝお立ち西園寺
を頼みて其夫公麾是を聞召ひ居なから敵を待ん八武
男の恥する所也とて二千余騎を率し城を出て
打向ふ大津陣時の勢を合せ坂に打掛て一度に入

内務省

乱れ東西に別れ南北に分れ七八度かゝり合けるに
土岐勢戦ひ疲して引色に見えける處に公廣度を
揉めや者ともと声々に進みけるハ押手一面に打て掛
るありや土岐勢破せめと見る処に武者一騎かけ
出る江村小備後と名乗て浩革の鎧着て大身鑓の
四尺斗あるに樫の木の八九寸廻りあるを四間柄にし
て尾かし蒲毛とて隠れなき駿足の力千斗の馬
に乗鏡鐙を敵中へかけも跳らせけれハ入縦横
十方に前後左右を突伏打伏或ハ甲の髄南太
刀長刀を薙落し或ハ人馬ともに屍居に打並へ

南方も是に雖てありける此勢に辟易してさしも勇
める黒瀬の勢開き靡て引退く公廣大音あけ
一騎合の勝負ハ付かたし大勢かゝつて乗とめよと
喚出て下知しけれハ押手取て返し咄と喚て打而
ゐる筆定かに見えし江村討れ小備後討れ続け
やとて打掛りけるに吹かことくにして攻戦ハ互に味方を
恥しめて引かれ進めよと云声毎に退く者ハなかりけり
大友宗麟ハ南方戦ひ居し力疲れたる処を見て気
負に勢らんと遥の外に扣て居戦ひしか時分よしと見
其勢一二千余騎只一手に束て横合にかゝりけり

内務省

黒瀬勢にて支へて戦ひけるか敵ハ大勢にて味方を
疲せしより一万余騎よりける荒手に越入かへ数多討され
て引退く者を後に寄て囲を破り出し追ひ
召黒し返せとも旗多く見たれは大勢の兼定
とて知りけれは一度も更に返し得ず走りて城
に入りて門戸を堅くし堅め度なる事とて防きける兼定
御手に家臣を軍を千余に備へさせる事吉とし一旦敵
にエボを付けれハ重て費りを之しとて引取せ立
に開陣しけるとかり

江村小備後帰陣并五倫切乃事

一 兼定ハ三ヶ所より帰陣ありし江村小
備後を召て御前ニハ此度の武勇絶倫を詞に述
たし御約束の釆地も除縁ありしかとも少しも猶ひ辞
さる所也幡多四国九郡の内ニ名ある所を一刀の
切にいたし感謝に言葉もあらず何れ免の所へ
陪り休息せよとて鎧一領太刀一腰を下されけれ
此鎧ハ黄門乃召領に候たるとの鎧之黄門
ハ猪首にて骨太く力強くして強けれハ目ら[illegible]好んで
しられける其鎧なれハ若士二人して[illegible]
出されけり小備後頂戴して謹て戴き謝して[illegible]

内務省

岡豊へ立帰り元親に見えて軍の次第を申上けれハ
元親悦ひ斜ならす我既に四国をは打取たり實隙
乃恙あり此上ハ時を以て遣なし処を此度さ
ハ已に此与約す和り我国を和し四國をい子攻
まじ九国中国を雲を翻し香取懐を遂まし
き前表なり是迄事の始と云此度の陣とは云
祝成の規式あるへしと道之ハ小備後悦ひさまさしの
饗應なとありして元親夫婦后子達の房以下織女迄
請し入二日二夜の善尽し美尽して元親かの何か
色々の品を賜りける中に五備切とて二尺二寸の小刀
を弥三郎へ賜る此五備切と申ハ先年備後江村
乃近辺に人多く失る事あり那にも失ひ世変に
つらなりて集り居たる中に五ツ四つ見へ出る獲
男女も見え跡を如何にも来て居ける所を志つ付怒
ろし或は以て片時の化生の所為とて人の目
をたもたしある後にハ化生の形を見れ或ハ鬼の形とも
等又ハ女に変し男に化して其所を探り后男女を
まかせ思ひ寄りに弥と若き近辺の童織未の
剋より何ともなく人々よの足に出る事もなく
門を閉て居たり依て小備後此頃十三也何なるよし

何者のすゝめにや我傍辺りへ来て障礙をなさんと寝所に
臥て居たりしに事也とありて或夜深更に及び
人静りて後人なき見すまして一人西江村の住居を
出寅の方へ向ひ行所に七尺大背高の大の法師に
なりて以の外道をさえぎりけり小篤後ゟ見るに大人の
ゆゑ化物よと思ひ我神にて近付をさき廻りに搔きたり
たる所を切太刀肩ゟ乙手にて通りして倒れしと見えし
か掻消ゑて失にけり翌朝村郡を尋て化物を
切たるを後に若者共呼集れ以前の所の者驚きて
に杉林を打し処見るに血のこぼれありけり是を追

行程ハ山の上に大きなる古墳の五輪倒れて空の
輪並二ツにわれて血の流れてありけるこそ不思議なれ所の
者とも是程の古墳を顧るものなけれハあやしき男女悩ませ
せし事を安からず思ひて墳を掘出し白骨と五輪を
大切に埋葬しと評議しける国郡付田畑寄附し是
ハ前代の不思議なり罪業深き悪趣に落し人
なるべし誠に不便の事なりとて石塔をたて菩提に立
僧を請し墳の前にて経をよミ弔ひしかハ夫より情
乃掘こそ此日離れ其後ハ化物なりとて無なりけり
して此方にて五輪切と名付けり大嶋源氏重代の鏁

内務省

切けし事ありて持ちけり然るに此書帯しけるにて敵を退し
國家を保ちけるとなりて孫三郎殿へ差上けるを
孫子まて一家伝より土居宗二を使として國行の
太刀一腰栗毛馬并足是ハ薩摩国ヨリ牧相也
下山弓百挺内五千挺と白木五千挺とぬり巻あり
元親へ送り給ひけり是ハ加賀合力の為の礼也彼下山
といふハ南蛮の名物あり周防郡須崎ニ市川といふ
かくれなき弓打の名人あり後ニ幡多郡下山の江
川といふ所ニ移り住けるニ依て下山弓といふ也文治
元年八月廿日民部大輔行景使者土左用参着以

弓百張并魚膠干物以下積ニ一艘船ニ鎌倉殿へ進
上せしも此市川か弓也といへり嶋孫九郎へも腰物
をそ賜りける此孫九郎といふハ元親の舅也何故ニ
此太刀を賜りけるとしらぬ處ニ尋問ニ去ル
の上方番人狼藉より事起て安芸国の不和にあたり
既ニ斧楯ニ及ひんとせしかハ一条殿元親ニ心おち
せぬ事ハ有るまし是全く元親の心底より起りけるに
らしと甚た称美せられけるとなり称ニ舎弟孫九郎
をつかわし人質ニ差出しけるハ黄門大ニ感悦有て此
孫九郎へ佐賀にて千石の知行を宛行はるとかや

右備陣の時ニ小備後と共ニ孫九郎ニ二ツ遣しけるに
只般と見咲とし宗三ハ隠蔽寺より城中の禅寺
を頼としてとらへ責擬へ付しと七五三の器を以
善を尽し美を尽されける所て宗三ハ元親より國俊
乃刀一腰馬を添足ハ仮之荒毛として八寸三歩有綿
三百把孫九郎より鉄砲二挺引手物として三百三束
銀子を遣して右両士へ送られける

安喜より備多へ加勢之事

安喜備後守国虎を召集めて申されけるは相良
馬の上より城を出る事生涯の恥辱也其時人数を

以来通ニ無之としも思ひ寄ても侍けるハ練めても関東
然とも兵宗候ニ尺て年月を経ハ孫武呂の亡甲斐
なき謀りを施し既ニ大勢を毛り一高ハ名を責
来りへしと宣へハ安芸備見進ミ出て申けるハ臣従
臣理ニ技り云衆愚之怪くハ不如一賢之唯一と申
事有之ハ道を知る人の識りハ知て謀ある事ニ候
勇將、士多勢にて崇り乍る城輙く責落されまじ
倒し恐らくハ況やお勢ニて寄て城を抱え是時の
運よる事ニ有之ハ論ニ戦ひの利も以て雖し
合戦の習ひ一旦の勝負を思ふ処ニ有之は大切ハ不顧

細謹大孔不必辭讓大節の宗となる処なり小事を
専らにして大事を忘るゝ時は大切なり昔新田義
貞を毎度乃名将と雖も赤松圓心に謀られしを嘆
て尊氏を圍て日を經て是を攻る所隙に尊氏西国
の大軍を率して責下る義貞敗軍なし其後また
義貞大敵の尊氏をは忘れ少敵乃黒丸を囲みけ
て無法に戦死せらる是一時の嗔に天下の草創を
忘れて萬民の依怙を失ふ古人の詞に若先甚怨唯
能自害豈能害人ともいへり誠なる哉後醍醐天皇
好敵の為に偽られさる事聖運開る時至りしも

以ての外なり此人乃戦死なかりせは天下の為
にも不忠なくして身の為に於ても勝利なり是偏に
赤松を捨て尊氏を攻め小事を以て大事を忘るゝ乃
謬り也彼を以て是を思ふに我等一家の上を
攻られん事を愁へ人々精力を尽し内外補ひ軍功を尽す
故に我らか向ふ所の敵も滅し小事なく一応貴き所
為されとも事ならす中部大膳殿手に属して一徒
威勢にて近辺を攪乱せし者ともを討随へん事揃
ある所もまた諸人か望にて沙汰しけるか情多きは尊
息の為なり只尚家は一家の親族にて其父は西郷

手段ては予さる事を皆もし之故不可思儀の変
萬出来しられて是を華ゆして其南家を窺ハん
事必定也先内を調て外を窺ハん為ニ中郷半派
乃後を待事特ニ肝要し其油断有まへしされ共
然れハ須臾本山の賊来合戦ニて其時ハ定て世勢
集へし軍ハ未さる起る時ハ必敵を招く事肝要
於此時同志ハ急ニ取鎮ニ揺る事ハ皆附ニ来ること
於之へし南郷の勢を東向ら事ハ不足ハ有事之
とも一条殿へ加勢を乞せら事大軍を以て一戦ニ討
をあらさる事有之へし然る時ニ夜便有ハ上ニ来候也

疑ハ御家中へし此度以ては中将九ハ國中を家臣を
然るへしと申ては一条殿へ加勢を乞へしと
然て彼等を元元親ハ本山を責めんは國
南ハ又国を是を攻んと謀る端郷蝶を窺へハ那須蜻
郷を窺ふ人有無を論せり荘子に謂て来ても
一条殿家臣を定め此事以て首尾へきと擔益を同
のみ安芸左京亮て申けるハ是ハ御申しさ大事ニ於
一旦攻めれと見れハ安芸殿ハ御親子の御中ニ於て
御望ニやらせて御加勢を乞せん事自論有り若さ
右さ時ニ御中悖乱ニ及ハ其のり事揭為也又軍號

ならず思ひきられける時に宮内より補服を下されしも彼ノ御
南家の旧恩深く蒙り居りしは偏に吾君を仰ぎ奉り
世三の忠節をつくしける事を疑ひなく知りながら尚も我が鉞
の手に一死を志しを世の中に知られたる忠臣の魁となりし恨みを含
て怨讐を晴さん事を思ひしかど遂に空しく親
疎遠なる者ありて其時に親子の旧中相隔て雑ならず
されば先安喜の加勢をも思ひしかど甚しき迄に旧敵
以て大なる勢を和平の旧縁に心を移さん事を恨をもあるまじ
し之を見ても心得へ華庭の実をもとて三千人以上のまま
悲しき次第なり

安喜勢岡豊を責る事

去程に国府八幡宮より加勢到来りけるに於て此事
洩きこえ岡豊の不意を撃んとて都合五
千余騎八流れ和食より結山を経て東村越書美郎岸本
まで勢揃ひして安喜を立て香宗我部吉馬丞［注］三百余騎
前原夜須の城の押へに置赤岡を西へ物部川を打
渡り久枝より二手に別れ一手ハ野田三田をへて国分
寺の先より［原書文］押寄る一手ハ大埇篠原を経て布師田の
東へ打出川角て東西の手勢を火を掛て時の声を
上げ打寄る打節岡豊ハ無勢乃上に僅の事なれハ

内務省
国立公文書館
National Archives of Japan

移動せし事斜ならず東南北の貴賤男女東西
に逃迷ひ周章する事極りなし元親兄弟ハ吉良より
城ハ要害の地なりとて立合者の士卒下大手
搦手乃手分して静かに如何なりせんと後西山次
左衛門尉を先として敵の中へ懸入ける(?)其外ハ深尾(?)左衛門
召連て立出坂本より高岡に打上石清水を打越薬師
田近く陣取夫より東へ廻り急き立向ふ其手ハ安藝
乃勢にて其西の手ハ惟宗左衛門尉一円但馬守安藝
三河守を始め一条殿より加勢と覚へて大黒備後守の
旗本にて其東ハ安田九左衛門尉有井玄蕃安芸由兵衛(?)

弥并杉田宗圓宗武恒光を囲み寺と見てて後を備す
頃第(?)を寄囲して中られハ元親甲斐て立物見飛脚
なりとて宜しからん我の處に近辺に住居の士一領具足
等やら備へし山際を堤備ひして見付乃ゆくて城
を旡く立向ふ險外に来りと人ハ人数不足なりし
勇み進て一同に打て出敵味方の乱れ火花を散し
て戦ひける處に立蔵頌の城を吉田大備後重俊と
敵より押入の勢を立岡畳へ寄せけりと見て凡ハ先
兵種をそし弓鉄砲にて多数ひはと暫しに打破らん
と計りる事足ても(?)ハ城中ハ無程打出る(?)

を田氏を寄せけるに法寄の信に依て至り郷るを聞えて
手結山乃方より武者百四五十騎押来る城中より
寄手の敵を味方と見る処に近附かるに三ッ引両の
旗をさしつゝ革はち吉田伊賀助重康と名乗て一文
字に討てかゝる寄手の狼ハ敵の成りけると後を防かんと
すれハ前に敵ありさらハ前に当らんとすれハ後より
攻掛る前後に進退を失ふ処を城中より尾をおちて出撃て
立追追し魚鱗破りける寄手立足もなく四方へちり
と逃失ける大備後足なる見て逃けるのなと八追てへ不及
思男の軍心元なし敵の後を遮り引包をおろす

陣より後れ者なとし伊賀助と名乗ほと諸軍を合せて
操まかんとて急ぎける蝶の如く国豊勢ハ心ハ猛く
勇めとも多勢に無勢不叶残りすくなにおゝされ城
中に引て入んとて逢て防ぎける寄手ハ殊に系て
大手の門を押破らんと息をも継す喚き叫んて責るに
けるに既にかゝりし処に不思議也八幡の社なきに
鳴動して白羽の矢二筋飛出百千の雷の落るか如く
鳴りとゝめいて寄手の上を飛廻りけれハ大将を始
是ハ事の不思議と肝を消し皆地に平伏して居たりける
所に暫く有て又元の如く宮中へ飛戻りける其矢

なりと首て毎まての鎧札に袖を足迄を携へて我輿の先
をかけらや敵味方音に聞く楽しる処に吉田縁
近くに鎧すもり時の声を起て苦しまけるが当時らりや後
少乃ある（有）かと云程こそあれ一騎に結ひつきて子を
親に揚ぐ郎従を三人をさし物の具太刀長刀雑具物
をお捨て我先にとて逃ひるる者多く勇士ありハ
黒あし返せとと呼ぶれども大勢の引立ちたる事なれハ
耳にも入らず古紙もはや波の中まで城中にハ
是をみて同じ海に出る心地して悦ひ勇て門を
開て打て出給ふと見えしとし鑑の神三里の間追行に

そこしらからす中すと福島隼人熊谷深助打負て追
かけらる隼人深助が計て是程の大敵なく落ちして
通るへし少勢ハ若者すせまとよと云ふにハ深助皆々
甲とて福島二十人切りられて熊谷も十八人て切りり
けるけ時国虎が鎗千と積まりその外死数あまた
返し合まて討死りけり

峰寺観音縁記付国虎元親和談の事

後に吉田伊賀助が三男弥助貞政とて常に峰寺の観
音を信じけるが或夜宿願の事ありて一七日参
籠して居りけるが中路藤蔵人是を呼て結縁

を祝せんとて酒肴持せて来りけれハ直持をもて出て
士にて家しける孫助申けるハ使臥竜山観音を信じまゐ
らせしへとき由縁記を知らば奈何竜の序ニて物語承
度存しと申けれハ直持高声ハ悦喜斜度先出ニて舊
記悉く焼失て委しき事ハ知らず然し乍ら日乃
乃鬼ニ花嫁誘ひ往へし柳尚寺ハ八葉山求門持院
禅師峯寺修ニ峰寺と号し嵯峨天皇の勅願弘法
大師草創の砌ニて本尊ハ十一面観音にて仏堂守の乃
昔は寺和て回禄の時南営光明寺放て南方補陀洛
世界ニ飛去りけるに後再堂再興ありて南営を勧請

せんと借衣の規式執行の雲に南営の種子空中
より忽然と種を降りけるハ又南山の雲中ニ石土神社
あり足南国二十一社の其西社の側ニ福蛇毒蛇の
穴とて巌穴二ッあり其深さの計り知れし被穴中
より大蛇出出くるを忙来しけるに或時俄ニ寺中央
出林木ニ纏付寺堂ニ及んで再以焼亡せし其節も
焼死して蛇骨残りけるを尉子の中ニ納め置せしが其
後度々回禄して霊宝旧記悉く泯滅して代々帝王
の勅裁将軍家の下文国司宝物寄進状等多しと云
乃ことも今は詳ならず二王ハ湛慶の作也其側ニ紅葉を

是を飛瀧ヶ井紅葉と云へり是昔より難行せし所近頃飛瀧智
井曽我の御進の為に捨身する所の花山院の御
存りし所にて是より此山の名木なる那智へ傾き
奉りし是観音の浄土南方世界補陀落世界に向ふと云
南山に南の峰まで去行不退の補陀落界なれバ菩薩
殊勝の道場なる事掲言なり一度参詣すれば運を祈る
二世の悪趣を除く事疑ひなし況や常住帰依信
心ある人々同じ志をつげし称て語られける強勇歓
喜の思ひをなして感涙をぞ流しける彌て四方山の話
語に実て酒肴もち出し実に忘れ一生の思ひ出となりし人

之郎等あまた随ひ来り七騎より少く出て
時の敵鉄砲の多勢を引て道から寄手を攻しハ
安藤より大軍にて思ひ／＼押よせ今軍最中なり
と語りたりし通りなりと大息ついて中にも吾皆
一応の與を営て誓ひ莚絶して居らざりけり
其時強勇に七度十六七の若者なれど一所に日頃
念じる南無観世音菩薩仏力を加へ給へと大音にて
喚べて太刀をつかて出んとすれバ誰も一所に
まで向ふ者に以ての外も多勢に武具を捨め
見て敵も人数を連て偵に行へしと云ければ強勇も

内務省
国立公文書館 National Archives of Japan

弟武運ハ天ニ在鎧を貫通ありしと気て山下く
去りけり馬ニ打乗諸勢を合せて川を渡しけるを
跡ニ有りける恒川山を追て来りけれハ大勢ニて其ら
ろまと進ミて打ち敵ハ忽敗軍しけりと云ふ落来さし
て追かけさり名栈の辺りにて見けれハ十四五騎ニて死ニ給
て静ニいニ退く武者あり孫助大音上て云ひけりく
見へたり其纔也返せとよ人かくいふハ吉田孫助後殿と申
者の也と詞てを鐙ふミと声ありて落行けり孫助殿
おもふ所ニ腔病者逃さんとて掛寄て渡り合武者二騎切て
落とし残り者ニ肝を消し敵ニ来て逃ける者ニまで

大将しあけれ其まゝ太刀抜て打て懸りけるを川すかり
と二打三打ちあひしか押並て組ニ孫助
取て押ゑ首かき切て立あかりける所を敵其人数を
合せも槍を以て丁度突孫助さし其ニたりと槍乃
者不首をとつて居る首を取ら討しと引合雷を孫
助こハ云ふさしやと力をかけせて探られハ鎗の柄
中より打折り敵肝を消し詞とも力なくして逃
行る藤蔵人を見手勢引つれ後れたると来て見れ
さ人の死骸ハ数をしらず算を乱して所より
入り敵を打物部川ニて戦て味方の勝と成り進

さしおいて川より陥りて逢ひける首一二三
らぬ者なるか勢ひにのつて見えけるか落人
あまりか不意なるに川端へ行向ひ見れハ三人宇
如此ニ流れに来ありと見ると引上て是何者
なりと問けれハ是ハ安喜の丈夫にて某も落人
やつかれか首を切らるとて恐れけれハ助けて云
まうへしとて彼等に向ひ汝等か首ハ某か為
なり取てゆかんと勢へともさそ思ふらん
皆ミ首をとらんとせしを急き安喜ハ偏り中島是
落人とて大善人なる首を残されける由申遁しとて

彼勢を救て之を収しける孫助これを見て落之
後ハいつの勢りたる大慈悲者なりと申けりと
云れたる又素より仏教を更て殺生戒を保つ
なり南無阿弥陀仏と大念して岡豊へ飛参り
けるか去程に元親ハ此勢ひに乗して安喜をせめ
亡さんと義勢あれハ国虎ハ申さく度諸将
ゆゑに仕換し自身岡豊へ馳向ひ安喜を一
戦に蹴へさんと互に牙を研ぎ不日に打ちんと軍勢
上を下へと返しける一家当所此田を呼ひ召しこそ
南家滅亡乃機一因動乱の端なり禍福道一〜非

内務省

去とて安並若松を使として申越し扱ひを入せ
かく人ハ両方其理に服して、たゝかひを和談なる
ゝ軍勢弓を袋に入せ太刀を鞘に納めて皆古
郷へ帰り、父子妻子寄り合安堵の思ひをなして
萬歳をぞ唱へけり

土左物語巻第五終

土左物語巻第六目録

本山陣乃事
安喜岡豊義絶乃事
姫倉金岡落城付小谷専斎返忠の事
矢流崩の事
安喜国虎最後の事
国虎の少乃方幡多へ送届付黒岩殉死乃事
安喜滅亡瑞相并卒都婆乃本乃事

土佐物語巻第六

本山陣乃事

吉良式部少輔義辰朝倉を落て領家ニ楯籠も本山ニ籠る兄乃九ハ味方の軍兵氣を失ひ力を落して此ニ集まり彼ニ會ひて落支度の外ハさせる義勢もなかりし處ニ高津那浦古味伊那窪汗見鹿那西川黒岩八畝三石大石大所子柳瀬長潤を始として並生の小松荻那飯田我那白川太郎九五百義那允吉那五王堂槙の山の専当山崎押谷別役老の氷乃小笠原森の土居以泉宮古那

於川地蔵寺石寺和田瀬戸本川の高野船戸大穀
菜瀬寺川の越裏門大森裏山の桑尾高川西川東
川都後楮谷中村口の勝賀瀬楠瀬梁瀬上八川下
八川寺野古江稲野清水津賀才黒瀬坂之許別
枝木安居大崎の若き地方は皆甚険雲霧の如く
なれハ今ハかゝりし勇こ悦ふ事限りなし彼本山と
中ハ國中第一の要害也山重り峯高し数百
丈断たる峯のそちに僅に足を側りかゝる細き
あしなかせえ青岩峨としくて澗水音遠し旅客
行人胸を冷し見上れハ白雲峯を埋こて水衣を

澗を望みてハかゝりかなし西は樫山國見嶺
にて二乃宮あり中にも國見嶺ハ雲半腹をめぐ
つて國中を一瞬に見る高山なり若一夫怒號萬
侶離遠難苦なれハ何の害騎向ふとも責入へき
出路もなし本山の地内に入てハ田あり畠あり村
里有大川流れて林木多けれハ歳十年籠城も
足疲労困窮の患ひなし故梅炎入を攻の墳なく
構ひ置たる智恵の程こそ浅からぬ所要害こ
て多勢にて籠らずれハ元親今ハ討手を指向ふ逢
かこえも見とまりかたさればたゞ責ずしてハ敵の旅へき

さなけれハ多勢をおそれさるを以へとも寄手を負ひ
討たれ計にて毎度利を失ひ引退きけれハ元親も
退屈して軍議に肺肝をくたきけれハ爰に森近江
と云者あり是ハ其先森の城主森右近頼実か一子
也故山右近大夫入道梅叟草創のはしめ森を攻る
事度々なりしか右近ハ聞ゆる勇者なれハ大き
に防き戦て終に梅叟和田若狭をして語らはせ和
田か一族与力して押寄取囲て攻る事度々遂に
も右近力及ひす大きに勇み討死せり其子
千松丸纔に遁れて爰彼所に忍ひ居られ経て岡豊
へ行覚世入道を頼ミけれハ深く憐ミあり懇に扶
助せられける頃て元服させて近江と名乗らせ其
後元親伊江の城主と成りけれハ近江大きに悦ひ
いかにもして本山を討覚世父子の恩を報し父の
讐をも返し身の恥辱をもすゝかんと念慮骨髄に
通りけれハよりく森の地下人をかたらひて旧恩
を思ふ者共多く与して潜かに岡豊の人数を引入
森の古城に立籠り義兵を挙けれハ本山大きにおと
ろき急き討手を差向んと議せられしと以へとも味
方に又何者か内応を企る以有らんも計りかたしと互

ま心を通合せて出羽守を討て此躰
にて始終の功を立られん事叶ふへからす瓜生
野の要害に引こもり防禦すへしと諸臣一同に
諫めけれハ茂辰義ハ尤さまに従ふ志なりしと
て永禄七年四月七日本山の城を明て瓜生野まて
籠られける岡豊勢続て押寄日夜の堺も
なく攻て質を替て責けれハ城中色々工を替て
防きけれ共強く勝に乗て進む時も又負て退く
時もありて南方北方引つ引れつ時を移し雌雄まちまちなり
とかくする中に寡ハ衆に敵しかたけれハ城兵ハ
落失て身を殺せし一族厚恩実ある郎従の
外は勝り留るハ歩の者計り討るる処に西谷口へ大
勢押寄ると聞へけれハ義井修理亮向て追払ひ
けれんとて既に討立けるか是を最期と思ひけん
ん人数をハ勝し直に敵勢八十五騎を引具して
を向けける寄手大勢のことく回るに喚き叫ん
て一面に押へける中に些とも撓す義光鑓入て揉ふに
十文字に討通り引返しては打破り四方八面に追
散らしと倒る松の木に馬を繋て息継く処に流
矢来て胸板にあたりしと留りもなく死ともなりける

搔くれとも痛手なれて負ものなるより落て矢
さへらり郎等とも立よりて討ちてハ何の為に命を惜
むへきとて一足も退かて枕を並へて討死をとけ
に西谷口を破せて敵押入とて上下周章騒き
けれハ義衣けを随ひなる所なりしかハ安敵と討死
せんとも口をしかりし只尋常に自害して恨を死後に報
せんとて鎧を脱置なへハ足をとめて少の者世をさる
ひきとる氣色なし二人の娘を左右に並へかなり力を
袖に隠し笋辰の死の旁に坐しけるハ倚子物照義
親二男内記義兼三男又四郎義直并一族郎從二

行に列して大将乃自害あらハ供せんと勝の
力にまかせて静り返りて在ける乃ち居所に
都之年の永く近き負て養丸なる頭るに本山
佐渡守より郎等あまた負しく馳集り軍ハ乃和議に
生て此そ就急に乃自害此か佐渡守まに其に於
何とも先立て知らせ奉りなと繁ひつゝて申乃白
是ハそも何とある事そと云ひ佐渡守来て申
乃白ら義井伊理討死いたし味方の軍勢筆を
失ひ色を損しなる鋤をうたれ頭てハ西谷口破
られ女とも労せつる首義員陣向ひ此處に吉田大隅

後人をこして暫く矢留をいたし給へかしと子細を
と申す所に住せ給ふハ吉田まで申付ハ識して
不慮の小事より起て大義に及び骨肉同胞の是
絶て胡越を隔て戦争曾禍一朝一夕の故にあらず
常に無人を廃し旧讐を報せんと欲し悔悟の遺言なれ
申来れて者ハ宮内か廃亡ハ父遺誡に背き離く是
かれの所存に及ぶ事唯天理をおかすものゝ故也
然りといへとも親子越て聴しきは同気兄弟
乃ちなり甥ハ猶子の如しと云り解ハ子に非ずや
熟思を近し何思を遠しといはん時に臨てハ是を

親きを患ひ給ハんや彼方合戦に及ぶ事あらは
而して所存を陳ぶといへとも同意なく隔りて猶もて何文
数通を出し尽せしかと素綱をやりしかれハ梅の
子細あらしとて其日の自害に留りて以て所存
義康佐殿を始てかくされ乃自ら元親兄弟甥
乃事なれハ思ひし者ハ身ともに義康に必遺らしめ
すなハちへ頗懼の内に日を送らんとせしに
所従妻子などハ思ひもかけし郎党阿波へ立越
三好河内守が積て時節を待しにかくなり
已通ハ妻子をも具して思ひ寄く阿守も計らん

ゆるされよと宣へハ義貞畏り涙にくれてありける
義辰ハ此事なとゆめ忘せすてよし岡豊へハ乃ちへとも
深く志ある親ハ人事にて悲しけれ又知らせぬハ
後までも恨むへしいかなる縁なりとも此の方に
向て只身ハ子なり并佐渡守なと具して岡豊へ参り
あへ我ハ思ふ子細なれハ阿波へ立越三好永治と
かたらひ親しくなれハ是を頼みて暫く月日を送りけれ
しは忘れかたくありて向ひの人を越しなく来
時頻て岡豊へ行ニ度まてらしかさんと衛しやう
なく宣へハ此の方実よ岡豊弟兼ねし思召ハ只道

理なれハ彼く佐渡守なともして急り様へしいかゝ
計乃事なる嵐にもまへて廉息のみおもしろか
しまへそ後々君分て善なし後ハせむへきたる運の
人をなくいしも待ちんと立出んとしけるところにかく
る風情なるへきまとも一番てハ地をさはりしととし
此こ観き張かく義辰衛の館へも岡豊を
さしても急ぎけるに道とゝ此の方之ともなくそ気
あら痛ましく此式部の夜乃東へも志ハせぬ旅の空暁
便りなく只馬きらんいかなる嫁しき只顔さん何
乃日何の時ひ只逢ひ来ふせ共なかれり歎てうきを

さるへき事やおはさんと歎きしつゝまゐらせけり義辰
は今は偲ぶとも思ひ定めて終りし給ひけれハ悲しさそ
増りける理りなり我一樹の蔭に宿り一河の流を
汲ひ給へる志ふかきをあはれみて別れさせ給ひハ名
残を惜む習ひなるに況や連理の契り浅からぬ
義辰十七才の年十三より馴そめて数多の子供ありて
しかれハ火の中水の底へも共にと契りまゐらせし
仰ありし別れ給ひても私先立しことを歎き
しまゐらせ後は夢にてもおなしき事ハあるまじと
思ひきりてそ髪をも押切て捨させ給ふ事なり達ハ

なまでつきそひまいらせたる者ども皆々供しけり郎等七十
三人召具して阿波国へぞ落させける勝瑞の城に
とゞまる譜代相伝のよりこ道遠日頃の重恩以て
かゝる忘れぬ事ぞ悲しむ事限りなし義辰阿波
勝瑞へ到りまへハ三好長治大きに悦びて所領をあたへ
一方の大将と定め給ひしを既に長治の先にハ
岡豊の小浦若と云所に結構に営をつくらせ陣をかまへ
自からも給ひける牧野の城にて居住し内記吉良
左京進を頭として蓮池まで知行給りける又四郎
ハ西和田越後守に婿入ありし西和田勝右衛門として

馬廻りにて城中にて侍りける

安喜岡豊義絶乃事

永禄十二年四月始めて元親使者を安喜備後守へ
遣して申されけるは先年不慮乃事出来て
互に確執に及びしより此方疎遠に成りきと雖も戦国の習ひ家
世に八必しも是を如何の怨敵とは云へからず頃日又
一家と復る扱にて和平せしむるハ上も望む所なりとて寛き
しるへき趣ありて近年中郷の忿劇なるよって彼に優ぐ
にあるものと格儀ともあるに似たり近日岡豊乃手際
然るに對面せよ互に天神地祇を驚かし誓約を
同しく昔日同胞乃睦をなし追て和親し患難
相救ふべしと誓詞をとりかはさんとなり使者安喜
に至り黒岩越前守に謁し此旨を申入ければ國虎
思ひけるは宜けれとも古典の法を考ふるに戦國の時隣
國の諸侯國の境に出て牲を備へ芦毛馬の血をすゝり
盟會して和を結ひし也互に領分の境に出て誓約を
なさんと好むならは是を和らかに趣くへし岡豊へ来り
とも降参せんとすや此の先は秦の始皇帝の末流と云
傳れとも日本渡海の後ハ大将分にて官位或は四品
等に應する計にていまた公卿に昇りし者なく只

内務省

義ハ兼見の大臣の苗裔なり家の衰ありといへど官
位の尊卑と云禄の多少と云彼か幕下に従ふへ
き謂れなし況や義ハ一家臣と父子の親みなり
彼ハ一家臣なり顧みる者なり何そ同列なる礼義を
存せん元親是へ来りて手を束ね膝を屈て和を求
乞へし義と骨肉同胞の睦をなさんとそ後急遽
なる者なれハ義を岡豊へ来れとハ奇怪の至り是非
に及ハすと元親近日中郎を打随へ勢を得てハ攸て
義を世に知らしめ事をなせと両家を離れて覚
えて馬の上にてもらすとも遺恨と成ん彼将岡豊

敗軍の恥辱といひ費甚しといひつへし一陣毎の
報ひにて意趣を挿て打過ぬ素より独り虞なれハ
運なと天下に信を安否を一戦に極むへしと大に怒り
告けれハ越前民尤なりとて去なから元
親か身より起て中郎大略打て勢ひ日々に随ひ猛
之月日に随て盛んなり夫万物ハ春生し夏長し秋
収め冬蔵す自然の理なり今当家の機を考ふれハ元親
ハ春夏の気をうけて発達の勢ひあり次で当家ハ
数十代繁栄栄耀にして物満ちる事久しく秋の半
ばかりし高則ハ危く易く満則ハ溢ると為しされぬれ

国立公文書館 National Archives of Japan

大なり貴を得んと欲して寡きハ巨なり富ハ財を蓄
へて修らんと勢強き者ハ弱きを示して暴なりしも是
皆老荘の遠き慮りにして識見高きものゝ寄る處之
凡占卜の法吉を得るハ吉の瑞也凶を得るハ凶の称也と云
足をも元親の世乱ハ後家の不吉の相也深く張公
藝ヶ君の字を味はひ枉て宮内少輔の跡を伝へられ
岡豊へ後来向ありし足強ちに後家の滅は
あらん我王と呉王の溺れたるめて会稽の恥辱
たとへハ韓信か人の股を潜りて大功を立つ事知
漢孫も奇なり大行ハ細謹を顧ミす一旦膝を屈
怨みあらん事豈恥辱とするに足らんや事なき
先に後名称あらハ国中なびきて後大家ならん
宮内少輔も自身の様子を進せられ一家同様
乃扱ひを為し給ひし故又元親威を無みして
驕奢あらハ是猶ほ害なり将驕則兵必怠ル所
要害を討ん事一戦に定へからざる理なし縦ひ
此国中つよし此ハ徒らに審むる得あると
此ときハ家も八千余の領を彼ハ三千貫の主なれハ
昨日まてハ直下に扱ひしをもし然るを今更彼の
旗下に属して岡豊へ行ん事中々無ひ可しよらへ

内務省
内務省
国立公文書館
National Archives of Japan

再び義絶し合戦に及びける時節到来なり元親
中郎を打随ひ置きしかへとも安喜郎ことくく手
裏に属して不知を背ん者なれは軍勢を不
足なし臣上一條殿へ加勢を乞ふ之に下し南家の勢
を合せて中郎の勢は拘の数ならねは負く元親多
勢にて向ひしに小流山新庄宗門の砦を攻落し
姫倉金岡へも人数を出し戦ひしかは元親南郎
へ手をさし事故ひもよらんなく及て岡豊を責めらん
事案の内なりしかとも家臣乃白重て越前中乃らを
御のごとく安喜郎を遣し臣乃裏の境内何とも

を以へとも他を以て国を考ふるに吉川土佐南郎の
城将とも本山に随て当之の味方にて忠義を
尽し非之しかとも今度は元親に属して却て
式部か勢と喜ひ越なは今取根の惟宗孫こそ
臣一族の臣親しけれは非之甚野安田同時孝平利
国山川相根吉良川津寺室津崎の浜著の城を
は諸勢南なは家の子郎等乃様を営て旅は是も
中郎の如く強からん方に与力せんずれは稍もて
稍すれは是非更姫倉金岡へ人数を加へ防かせん
事をば越はへなんば姫倉より此方に吉田大備後上夜

内務省

須二大私鈎鐘り森尾ヶ森四ヶ城をうちまへ偏ニ伊
賀勘和食の郷を領して馬の足ニ其儘近里と
以ひさ為と以ひ兵粮武具の運ひ送自在ニ通し
於ける　又ハ流新庄宍内の要害と思ひハ重雉の
甲を植るニ同し　大軍の截所なしとも事の於
其や又一條殿の加勢乃事も覚束なく於茨門に
心得置しより根もなき色の多く悦ぶの如く一
和与て此於を得て豫州方蜂の如く同して取り
於ても加勢さもらるとまなく　其事ハ於てへか
らもく元親も鉾横ニ及ひ於て偏ニ石を抱て間ニ

望むにひとし只家の滅亡日を追て近くなれハ能々
只思ひ見るニ於てへと悔りなしやさみりし元ハ国府たまた
腹立なり抑ハ我を元親ニ對揚なへき器ニ候ハねと
とさこうして戦ふ有先ニ軍の勝負を決せんニ
業なし是迄ハ一分の所存ニあれと諸人の指出
受しなさり武門の瑕瑾生涯乃恥辱なり命の
長短家乃盛衰も天運なり急きへ其ニ首を曝
さるとも元親の幕下ニ降る事ハ我人ひとよからん
と大音揚て宣へハ黒岩力ニ及はて此上ハ是一
所ニ尸を曝すへき死なしとつくやきて留まるの

伐をも致し候

姫倉金田落城并小谷寺南田り忠乃事

去程ニ元親と國虎和睦忽ちニ破れしかハ安芸
八郎ニハ嫡子ニハ惟宗出羽守益長同和泉守長俊櫛
越左太郎右衛門 宮津半三郎 安田弾正忠同源兵衛
一国但馬守同民部 安岡出雲守 小川孫之進平鍋
兵部 中山権左衛門泰俊 安田三河守益信 宮田弟之進
宮俊同太郎兵衛歳将 百結衛人 首井 玄蕃 杉田島
新兵衛五江川弾六右衛門 島〔島〕高河小兵衛 黒瀬兵庫入
道 前川近江守 我部右衛門 柳瀬兵部右衛門足守を

先として都合五千三百余騎 安芸西浜東浜ニ并
杉田駿河守先備せり 岡豊ニ知〔集〕ハ香宗我部 右近太
夫親泰 吉良左京進親貞 江口山掃部助親具 長宗
我部左兵衛親武 吉田備中入道周孝 同次郎右衛門
重貞 秦泉寺豊後守 吉松式部 稲毛右京 大高坂長
門守 国沢将監 十市細川備前守宗桃 同備前守 近
江前守 大黒主計 同与七兵衛 今井右馬助 弘瀬家
右衛門 石谷民部少輔 福富山加賀守 永吉飛騨守 五百
蔵左馬進 那須尾後兵衛 太郎九 孫地坂 楮(カチ)佐古 外池
神通寺源兵衛 柳井瀬孫市郎 を始として 中

郡の勢馳集り七千二百余騎となりて旭しける先に
志る時ハ人を制するに利ありと志かも相縁まで
ならんと打立て香宗我部左近太夫吉
良左京進を先陣として七月十日岡豊を立て
姫倉へ押寄せける城にハ弱しける事なれハ究竟
の射手百八十四人櫓乃うへ登り矢の落るかさし詰
引つめ鏃をそろへて射ける間時の間に手負死人数
千出来て寄手陣を引退く其夜より城主姫倉豊前
守同右京亮是を見て三の城戸を開き押出て二百
余騎轡をならべて出東西南北へ切破り打通りけれハ

寄手蜘乃子を散すが如く散々に成て二十余騎
を討取りける城中にハ初度の軍に打勝て首途
よしと悦びけりされども寄手ハ多勢なれバ蟻の
如く隣のごとく四方より押寄け息をも継せず
攻ける間豊前守叶ハずして安喜を志さして落行
きけるを岡の城にハ黒岩越前五百余騎にて立
向ひけるを長宗我部左衛門山操ニ千余騎
卒して押寄せ揉に揉て責ければ黒岩も勇
者なれ共事ともせず三日三夜息をも継ず戦
ひ敵を討取事若干なりしかども味方の軍勢

賊少なに付せられハ累日をも計らし城を捨て
退きける姫倉を金田を同時に落されて大勢
攻め来るを防ぐへしとハ安芸の毛利斜ならず
矢筈宍戸を防けとて兵を分たせ置しより日来
とも元親を和睦に着陣して軍評定ありける処に
安芸大備後中の日ハ重俊か領国東河の辺ハ兵先安
芸の領にて持き兵河辺ハ来らて高家の二の丸
国年の祖父備後守元親播磨の守より彼田家の
重宝なる世継に所望して奪ひ取りを悲しミ予ね
元の事あるし讒訴ひ進へハ領主の密かに背く科也とて

二人と共に所帯を没収して追放されなかなかここに
古田家の後に飢死を思ふ妻子古への夜深くの戸より古
一族親友を頼ミて隠れ居つゝ後悟し族重俊夜深
刀傷乃手しめより彼者と出来て安芸人及譲向き
族之人々を案内仕り父の讐を報し度思ひ再三策
儀なく中ニ存じ彼者を安芸へ同着に送り恨ま
て見遣し族に背深く見える越前より外は心悪
き者ハ族の内にも小谷専当横山ハ人なみに越えて
勇猛を多く持ち進へとも共に懇心深く智恵浅く一途
味方に入へきを存し族に音信を通し心なかくこゝに談し

内務省
内務省
国立公文書館
National Archives of Japan

於旨彼間者を遣はし三人を計り出し申と申されハ
元就是を聞給ひ急き拔とくして只今とて宮田乃方
大備後に至りて間者を呼寄せ小谷吉田横山の方々
おりて申させ乃ち八近日宮田の補佐中郷ら
平伺有て此度安喜を討果さるへき為の大軍を
催し既に今岡に出張時に路破り兵食を取て着
陣あり近日安藝へ押入る用意を致し即時に責破りて
と云事乃由なり然るに於ては安藝幕下の者一人
も安堵なるへからすと申遣の事ハ安藝譜代の家
臣も云ふなり此時の権に随ひ皆々計り出ける

若干親しく於ゆゑ宮田の勢へ触れ集め其事種々語らひ
き先に此事を味方致させ於て我等但し云に及ひを加
恩ハ先に任せらるへしと云ふ乃ち間者急き立
越勝に対面して事の由を申聞せ乃ち敵の威勢
に恐れ乃ち人悉く心を変させん一議なく及ひ云けれ
使者して返し乃ち中すゝ小谷四郎右衛門ハ云ひ和
もとよりあつき郎従四五人召連れ吉田の陣へ来り乃ち
大備後よりて返しつゝ其の本陣へ乃ち元就見玉ひ
て速来る事神妙なり急き手引仕り於て仰せ
られハ畏て於ても赤坂の出張へ入り矢源の小左衛門

若狎尻を経て内へ押入りてこそこそ見れ

矢流為起の事

矢流の嘗てをこのる事とハ夢にも知らぬ婚禽

岡云甲斐なく責落され人目に恥かしき程の

列にあらねども味方に乃抑されハ何ぞ同し恥

辱なりおこのうへて両之一足も退くまじ以てよくし討

死して先度の恥をすゝぐへしと二千余騎の軍兵

とも神水を飲てしつまり返つて押へ寄り事の蹟

実に思ひ切りたる神気なりと先源しみそ見て寄りける

岡田要ハ前度の軍にうち勝（勝）て安穏要に

（足らすと）思ひ時の声三度發するを揃へて是ぞ敵方も相授

て鬨の合声を挙て責戦ふ馬の足音雷の如く

射違ふる矢ハ雨のふるごとし落ちて負て戦ふもあり

深手負て討たるもあり或ハ引組さし違ひて死するもあり

或ハ並て押く首をかくもありこの矢をもあり執儀あ

野とも見てまとひけり兵ハ馬蹄を浸し尸ハ地理に横たへ

りきまり捨る心をも一にして身を尊しと防ぎ寄に

戦ひ屑し既に引色に見てけるを勢に抑へるをおしよせ

沖の方より貝鐘を鳴らし都て是を和して時の声を

ぞ発るを味方を驚かすけり也後に聞ハ吉田左衛

内務省

内務省

国立公文書館
National Archives of Japan

門佐孝俊が計らひにて近辺の猟船を集めけるに長
を取のせ山の戦ひ半ならん時後ろより討んと心
引し處に西田彦寄り中合せ乃日ようや安藝勢
其ぞや敵後ろへ廻りしとハ手を分て防けやと色めく
處に隠さりけりとしと変ずに吐し実掛れハ安藝
勢僅ニおすけ数多ニ生捕て引退く吉浮に揺變を
引て向の高ニ命をハ惜むへきと競掛敵の中へ些
毛撓成せもらけ入吹たなぞらして戦ひ乃ニ二階孫
左衛門十七歳鎗を取て突てかゝり吉浮を打そ
ろり小村大将随ひも打しと打て掛りて示を飛騨是よ

ありと掛寄て切結ふ互ニ手引の達者へ申せとせ
爰に令しう飛騨が刀の脇より鼻へかけて切付
られ既ニ危く見へしが押のりり押へ切ニ切れハ
小村勝のつらひを放されて八逆ニ落れハ乃ニ馬
ニて無勢ニ乃日将之動太郎左衛門宗武深四郎之国
孫三郎宗国八郎左衛門大理田義本松田島新当
門返し命も之ニ今も或ハ手負討死して防き戦ふ
と云へども敵を機ニ乗て獲(勝)时を飛りけし貴付
て追ひけしに安藝の二手軍勢混引ニ引乏て首
て掛かりとみつり見て敵先手ども落行けり时の人是

たゞ矢疵を受られしのみなり黒岩越前守一子掃部種
直十六歳なりしが大きに戦ひ右の腕に深手負て
働き難ければ日暮て安藤ハ引とらんと新二郎の林
の中に隠れ居たる処に別役左衛門といふ郷士勘解
由新城とて二人甲冑をきて茂みのあり掃部ハかくれ
居たるを見て首取てよき役にせんと茂三の中を
押分し来る処を掃部左の手にて刀を抜て新城
を切けれハ勘解由逃んとせし処を飛かゝりて押へ
変を掻切て負門ハ一昼夜に及びて首を切へしと
云けれハ畏り候とて背に負て茂みを押分て漸々と遠き安藝

の町に到りけれハ掃部始め勘解由に仮をなし足を留め
とらせて立返しけるがかくて同月方にも中島与市兵
衛横山九郎兵衛吉田左馬允井上六郎兵衛日野勘助
横山源兵衛坂居因修理群に揃て働きけるが扨
田の一領具足に何某とや白髪の老人大きに勇を
震て多く捕る者を吉田四郎右衛門ハ逃る敵を追かけ
けれハ此処に難と思ひ大の男三間柄の鑓を持ち
茂みの藪にかくれ居て近づくを待て千度突出
てやりけれハ左の目を横さまに突き抜けり四郎左
衛門ものともせで其鑓を取て見を敵逃んとせるを

則残付け郎等に首をとらせけり次郎左衛門片目
に疵ありけれバ時の人せんの次郎左衛門とぞ申しける
平坂を過ぎてハ次郎左衛門が子に国貴を称て平こそ
名をも得ける其上平家あり其の先ハ一日なれど片目によ
りて異名をしてありけるや去程に八流の営を破れ
ければ新庄定国を攻めよとて黒岩越前守沢右
見えて先として宗徳の勇士百余り乃日なりしこの新庄
と申ハ八流より安喜の城下なりて六千余町左り八大山
屏風のごとく囲ミ右ハ海辺遥に眼をさえぎる平坦にして
つゞき海涯の道ありといへども細砂深くして人馬の掛
引自由ならず されハ山より矢石を放つ時ハ何百
万騎の勢なりとも石を以て戸を押すことなり
況や新庄の竹叢石の間に逆茂木を結て数百
挺の鉄砲を備ければ元就も是をこらへかねんハと思ひ
安喜の地へ入給ふ思ひもよらぬ間も勢気
とそう騒ぎもなし 姫倉入合留矢流数度の戦
を重ねし 西へハ進むにも安くハ一足も引かへ
らぬと諸卒心を一致して一つになりて結
びけり

安喜国虎最期の事

矢流の党を破らせて残黨皆新居宛内に入り
ぬまより助けて之れて國府の一子千寿丸とて十三に
なりけるを呼出し此度乃軍味方無勢なれば
新居宛内へ引退くと雖も此の高山兄弟を追
急ぎ向ふへ兵を矢野備後を頼て此弟を討て家を
相謀りし此事懐て遂之へし矢野ハ手勢を親
しけれハよきと見捨ハなるへしきと宣へハ千寿丸思て
申けれハ只に加勢に頼り時ハ定て我等生害を極まる
なり覚悟の武士の家に生れて五や六や乃至十
歳ならば是非も無時節ハ力及ひなく歎に善悪を定る

程まで父の討死を見捨何方へ落行難き頼
む誰より兩を向ふへき猶予ありて後
乃栄達を開き勝を得る一族の恥も在れとて其
捨をさし然んハ生甲斐ハなかりし只乃最期の時
俄にし死出乃山三途の川の渡りを引供せんと
と落つきず気色ハなかりけり國府之を聞て也中々に
理り至極せり流石國府の子なりと涙を流しながら
心を静め乃しく云けり姫倉合國矢流ホの城を破
られ今日以てより新居宛内の本城堅固なりて大勢
楯籠るゆえハ此軍必負へしとあまり終せ

とし軍ニ勝て活残らんと思ハ不覚の至りなり況
や大軍を引請たる処自然の事のあらん時ハ父子一
所ニおゐて死せん事具ハ智の為さん所なり早く離れ
て再ひ家を起し武勇積徳をかさぬへき理なき
にあらすや況父の詞を背くなれハ七生まても勘当せ
し一度ハ思ひ止り一度を謀めて宣へハ此上ハ力なし
なりと御ニ随ひ奉るへしと涙ニくれて折かり行り委示
畠山内蔵丞同右京同左近丞とて兄弟三人ありし安藝
氏ニて国府ヵ従弟なり畠山ニ仕へ凡ハ畠山とゝ申
候ヒ国府内蔵丞右京を呼出し今撰ミて乃次第也

何卒運ニ千寿丸を頼むなり先の事ハ宜しく
頼ミ参らせ候と申されけれハ敵寄来れハ先ニ急く
へしとのたまへハ兎角辞するニ及ハすと云ふ城を
立出て又運ニ添ひ奉り所京丸寄手の人々を忍ひ身乃
行末観子ニ告けの方へ別れ出けり也て其時にてあ
わせなり小川畑山正長并ニ小川彩野を経て戴
多なりと云ふ柳瀬の内西川殿ニ至り小郎より当地ニ山
を経て薦行たりとて中ニなり三吉河内守長治家
臣矢野備後を頼みて身を送り後矢野ニ女子ニて
男子なり又生れて折ても其子智算ニて家督を

宗田矢部又六郎と云名のかくれたる安藤城中の
軍兵存も味方狼狽を塞て防ぐと叫んでしかハ
義経を破らせん事ハ鬼神ハ知らぬ今宵乃所務
手を打ちて笑ひ是より岡豊勢ハ八流に集つて軍
評議の日を送らんとせしハ（上下退屈して油断するハ必定ゝ其時ハ新庄より夜討して）遠く過ごしぬるに
城を出て安芸に着きけるよし鎧腹巻太刀刀をハ
槻よとりおろし高鼾（いびき）を以て打ちたる夜半に元親も
小谷四郎兵衛ハ案内にて内所原へ押あけり
城を目の下に見おろし二千余騎同音に時の声
を発し弓鉄砲を雨のごとく放しかけ喚き叫ひ

攻かゝり城兵共是ハ狼狽或ハ裸にて馬に乗て
鞍を打者もあり或ハまつせる弓に矢をはけて射
んとするもあり或ハ物の具一領に二三人取つきあ
ふもあり舎弟ハ兄を子ハ親を捨て従者ハ主を
知らず只城を落んと倒れ転ひて落行ける
至中更恥を知り義を重んする者ハ生きて（一本ナシ）何かせん人々
乃振廻ハ扎大将ともたのまれ仕舞せて大敵を請る
猶乃兵共乃働の事なれハとて戦ひ逃るゝや
ある何捕に勝るへきなれやと向ふ敵に立向ひ
思ひ切て戦ふしてにハ太刀長刀

なく打折一足も退ず楯を並へて打死し為りけり
新居宛内学八田丸よく弓の弦喉元を射しめ擯せり
なく引出さんとする寄手の所を待処に元親同道より
内應して攻入城既に危しと急を告る者の櫓の
鐘を引ならし諸軍大きに驚き付上ハ力なし
身を引一所にて打死せんと要害を打捨安芸の陣に
差籠りけり掴とも須のうちの寄手とて雖きぬ町
へ押入ければ打渡黒岩急き国府の前に出けれハ
備後守小谷香宗か旧恩を忘れ返り忠して敵を
呈引入すと最頼しく彼奴か首を取て仏易く

自害せんとて出たるハ吉良か家りて八世田の事とも
くれ乞やつらか首取て同じく掛けよへしと二人一
所に打て出大音あけ打渡右近黒岩越前なり
小谷香宗か右家臣にて汝らか首を取て返り忠の末を世に
よと呼りまて大勢の中へ駈入り追廻し切乱し
八方を押て四維に逐りしかハ一刀辛息もなし
て高の足を立て数手の元親見分とて甲ひ多き
者とも武敵後見神のこと足二人ともに見て引
事なき馬の足を立て立て中に元竜討留よやと
逃るもなく不知せられ気の諸軍皆に力を添て二人

を中に押取籠あつさしとこそ揉もりけれ黒岩
首澤が手を撥残せしも少名ハ何所に在るとも知らて
黒岩ハ首とられ雪斎ハ討きゝり出合て首澤を打留
より声々に詞り叫んて東西南北に顔を向けて小者
乃玄向小ひく纔の者の山手に遁かるゝを押付母衣付
あかりて筆山手に切て出る甚麿不撓其目不瞬勇
氣に三軍を奪て勇り雖之見へしか乃ハ岡豊勢七千
余騎引取て兼ねて引退き遠攻にそしかりけり乃
首澤黒岩を備後守か後詰遂にて乃覚はさらんと
て城中に引入り国府の前ニ程て少名雪斎眼

に遮る所乃ハさ晴て万騎乃中に乞兵れ殊細
を張て楯籠るにも踏（踏）破り打出へしと存敵万騎
二万騎乃乞四五百騎騎ゝ充てかへ今下のりく
打破らも只ひと筆なし表を分け裏へ抜け進み
尋て馳出り抹下をと健く戦ひ励し共れ共只四人
乃の外も遂に失えに近付なつけ共生死をあらんとも乃
乃百七十騎打捨て抹と事ともなりに語る者最
後に近き国府を取りし心かて晴られ乃か角て寄手乃
勢新手を（更）更へてせめ掛る城中ハ小勢なれとも
たゝ一残りして手騎り一騎に其数をすてゝ打に引かりしと

争ひなりけるし處を専途と戦ハ此軍の時宜
つきと見へさりけり然るに横山武部謀にて城中
の井水に鴆毒を入れ置て吉田か陣所へ入り此由を
告けり乃悪き奴原の謀なりけり是をハ志らて城兵
共一日戦ひ渇きに臨て井水を汲ぬき飲けれハ身心
悩乱して悶絶（此処一本二字閒アキ）死するもの数を志らす是ハそもいか
なる事ぞと周章騒く處に天狗以下入道いて
以ての外也と驚き騒き給ひしかハ扨ハ此もの横山か悪逆に
て城中の井に鴆毒を入るると云ふ事こそあれ諸軍
あきれ果て暫く國帰も手足を痿らし地にして

黒岩か脊をなして力を励し此を附て数十ヶ度
の大勢に掛挫きしもんより乗寄せ自害して軍勢
を助けんとや叶ふましかりけん手付て小の方一所に失
せんも痛はしく又指添んも流石なり何ともして情ある
返り届け以て分の隊衛せんとや思ひ面扨此の外の計ひ
しに宜へハ此處所を返り届けんハ何より安き事
なり某計ひ此供仕るへし此心安く思召給へ名見ハ
此最期の此供致されよ某も跡より追付き申すべし
死出の山にて待ちまへと鬼の如くなる黒岩を後に
見えて名残りける名見足を見て拝まれけり黒岩

彼君に別れてのちも幡多ハ往来の宿なりし所より
追付ぬる之事もと云われ又是君でさへかくし留りとも
て用ゐず一身りなる甚度備後守宮田か人々を率
ゐし国府運命既に尽き其場を去り浄貞寺に於て
生害を遂べし軍兵とともに命を助け参へ落所
望叶はずとも力尽し士卒と心を一つにして城に戸を軍
門に開き一しも中をとられなば元親卿の国府
生害の上も諸軍ハ悪く助け然べしと紀綱文を
出して是し攻の口を開かれなば国府尉の軍兵とともに
皆腹を切りなりしと一所に討死せんとて付まとひ

へる者ともを参れハ此旨も君聴かず悟らうへし残あり
らねど立別れ已りさぬしまでにける去れども備後
守此の方に近寄ありける最期を知りても別れ
に際をいかにせん後ゝの世て敦きのみハ力尽し先
立りして幡多へ送らさるやとて宣へなるハ身体紀に
お負て軍をとるや今明日に極りぬ子孫をハ先に阿
波へ落しぬれハ我も心肯のまゝに急ぎて落行し
只身ハ此比明を伴ひ幡多へ云載時節を待ぬべく
し何方に心留め藁付ぬれバそれまでて近の人を
集ふせめとかされバ程なく此の方ハ只夢の心地して兜

内務省
内務省
国立公文書館
National Archives of Japan

内務省

角の返しも世にも恥辱のかゝる身あつてなさけ
なくも盛りはまた猛武いかなる人我の末山の奥までも
身をしこそせまもかくれ同じ草の露ひとつ成の
ことのと共にんとこそ契りしに更揮られ気ふもそ
誰を頼みに何を便りに暮らすべきやめて身ひとつの
八内の身のせんなき事さも此をいはゞせんと思召そ
身をも捨ふそと名を穢しもなふされはこそ叶はぬ道
了れて国府思ひ切てこそ其られは婿君たり出
父の鎧の草摺にすがり是はされていつまでかくもやなふぞ
や我も斯ふん見もさせまへと泣けれは子は三界の首

くせとは今こそ思ひ知らせられ申さんかりけるが悔し
乞られと却て悔しく抑えられ見れは御最期を
志もさりけるとも名なかられける根あるべきにあらざれは
首浮一人は傍にて佩剣を抜て機にて候
と立出て御手をさし上て息も絶えしも心のうちこそ痛はしき
半の齢にかゝる最期なく浮貞寺に入まゐらせは佩持玉ひし一句
の偈をとさらつけなり心静かに念佛して腹一文字に
かき切自ら首をかき落し贊は我経せし如く
まて死なり家子近習に仕へし何某国府の勘解由
後て菩提して弔ひなりけるも是までこそなれは最

内務省

後の世に傳して敎化を蒙らせんとて其君の德を慕
給ひけるを国師之を見たまひて怒て道より追返
されけるに世態なれ共故に篝を坊主一人下部一人
寺にて潜に付来り最後の供をと志有けるを志を訛
し給ひ柳国師と何故に付来りて其害を遂られ
けるにと其後其尋ねて国師の祖父備後守元親と
云安芸の元親と云人なり法名正仲浄貞と謚し
先祖代々其菩提寺なれハとて元親山浄貞寺と
号し先祖代々の位牌を安置しけれハ実子にて
国師の弘りし一仏浄土の縁を結ばれんと為し

ありし事とかや也国師をハ円海心覚大居士と謚し
其浄貞をハ桂岩芳樹禅定門と号しけり彼
赤見の大臣の苗裔は国をかり此所を領せし事一
千余年子孫も多く繁昌して恩沢を蒙りたる民
数多ありしが国師の霊を慕ひて志を尽さしめ
永禄十二年八月十日ありし日より前之数代
乃栄花の盛も時も所も替りし物ハ安芸の紅葉と
ちり失せ彼首ハ残りありし事なれども此の跡の衰ふ
如探首為轉変の世乃習ひ歎くにも余りあり
けり

内務省
内務省

國親の北の方幡多へ送届付黒岩殉死乃事

去程ニ越前ハ城をかけ出敵陣ニ向て大音揚けて是ハ黒岩越前と申者なり御陣へ申度事ありと呼けれハ出雲守の陣より武者一騎馳来り何事ニやと問けれハ越前備後守殿ニ生害致されて北の方ハ一條殿御息女なれハ足ニ携置申さす余り御痛ハしく某御供仕り送届申度候御申請けれ共御免なく候ハゝ中村へ送り度殊ニ此旨御披露被下候と謹て申けれハ武者立帰り此由

。申されハ元親子細なく急き送り届けよと許されけれハ越前悦ひ小船を拵へ北の方姫君を乗せ参らせ折節順風なりけれハ程なく幡多中村一條殿へ御供して参りし由。

を申入けれハ元親聞て飛立ほと悦ひけるか元親要害よりの御陣へ触されて御逢ありける先その士是なるは黒岩越前ハいかにして活残りしそ哀なる事やらん此の者ハ所存やあらんあまりの事に元親の方に無類の士と感せられける其後の事ハ元親の御前にて若武者共に申聞せし宮田か越前殿と向ひ其れハ黒岩越前殿と見てより宮田越前殿対面ありて此の事に付急き越前へ申されハ越前畏て承りつきて御前に出けり元親の今幡多より帰りて悉ク送り届ケ

と申者ハ黒岩家より寛宥免を歎候得共所姫君
身退まり送り届候得ハ讒ヲ生し無之申雖も自
身息ニ於て謹而申上られハ宮内ヘ安藤ハ偏ニたり
ともこれ等の方ヘ有之しられハ元親ニ奉公致され
よ前知ニ増して召使ハるゝもの宮之られハ黒岩ヘ謹
て冥加至極有難き候段ニ於安藤滅亡のうへハ是
何れニ而もこれ等申べき筋ニ而岡野ハ召使以來一向奉
公仕り度旨ニ候ゆゑ主君備後守殿最後の時も
無り宮内ヘ申上候處所姫君を送り届一條ニ付
御談し候事世於て任準ニ披露申上一七日乃

内務省

法事を遂し後岡野ハ伺公仕るへしと申上られハ
元親神妙の志を感し早速安藤ハ二越ニ静ニ
法事を遂不日ニ岡野ハ來るへしと仰られハ越
前國ゟ於ハ召請を申神之助安藤をさしてそ帰り
ゟ吉田大備後黒岩の誓を見送り涙を流して
人ニ語りけるハ此者ハ重々度國ニ而親しく
音信を致し於ゟ近年の悪劇ニ依て通路を絶ツ故
されハ彼ゟ心底をも委細知せり唯今召請ハ申されハ
ともも全く降參を心ニ非として見事ニ餓死ニ至るとも
色来りけるしきとしゟ仰られ実とも人もありけむ

内務省

以る勇節を世に背きしの事飢ては心を替るといふの也
とも強くもありしや大備後邑々の神なりとしら
されば本意にあらず且は不便なり且は彼が孫子ども
窺ふ為なれバとて物さへ乃ごとく雜餉を調へ家臣横
田三郎吉房に申して是岩の方へと送りけり扨て
越前にも安堵に帰りて見れば城郭は敵の為に焼
落されて形もなし況や民家に於てをや更に便り
詠きつ以つちなりふん語入仙氣雑為半日の旅ゐ悲しみ（蓋雖不為半日客之訛歟）
妻子の行末可ふへきハ尋ぬれど尋ぬに及びす直に
浄貞寺へ立越えその菩提を弔ひけり折ふし其横田

三郎吉房は雜餉を持ち来て使の趣述けれは越
前守にて一家のものとも忘れし今此節に及んて
懇志を預り事浅からぬを深く山よりも高しと悦
ひけり明日は亡妻の一七日なれは浄（法）事燒香をとて心
静に逗留し人しさればとて休息せよとて寺の傍に
休みけり翌日に至り浄供養心のごとく執り行ひ横田を呼出
し急ぎ帰りて申へし此度宮内が庭の恩を蒙り
少の者雅君を送り届亡妻の追善心のまゝに執り行ひ
候事二世までの恩芳志謝に報し参らし雑々其
八斗途聞かへば参り其後宮内庭さ

大坂なる白井九兵衛といふ者人に異なり世に黄
泉の旅に赴きまうさんとて浄くして前月日に於てん
と痛ましく於譜代お側の主人見捨ることを說より追
付べきと存し佛前にて切腹致し一家のもの一ニょ
も夜の內にそのこと且又三郎吉房の介錯頼み
於也妻子の行末を託し其後頼みて籠りに一命
と云も敵を切らんとて腰のさし添ぬき持て
左の肩先に突立右の稜際まで引付又大力にて左
の方より直し右の脊先に突立左の稜際まで引付
佛に向ひ合掌して念佛高聲に唱る処を横田首

なお折節も碧巌久岩禅定門と諡りける右君國府
八月十一日より生害有里君越前八国十八日にて其
君の一七日の追善をなして殉死せしも有けるは
前代未聞の事也と惜まぬ人はなかりけり

安喜滅亡（瑞相）并卒都婆の事

凡天地の間に吉をあらはし凶を示す事初てなき
にあらざれども爰に稀なる（安喜の家の亡ぶべき前相家に顕はれけるこそ不思議なれ）今年正月三日畑山内蔵丞
弟子兄弟安喜の城郭へ年始の礼に出仕し祝儀
乃規式早て四方山乃物語に数て盃席御なかに
内蔵丞が一子熊王丸を呼て八才なる兒と同年にて

内務省
内務省
国立公文書館
National Archives of Japan

なり年十三の頃より発して智恵を用ひしかは
き是を一目に読て見とゝけて或時白紙一枚投出し
させしかハ南人畏て閲する人今年安藝の国乱起
り城急に落去して一族悉く亡ひ千寿丸能見丸紋
乃橋と名けと読しめり当世具足を着し包丸と出せ
目と目を見合一言も出さす此なし能退出し居り
たり不思議とも何も怨也国人八方に致方て
評判せしかハ大きに心を動かし甚たあると思ひて度
城中の妖怪多く出しかハ深くかなしみて人の
志すせし諸寺諸山に仰せて護摩祈祷を為さしめ

見ことく物に乱りあり定る時節也乱り乃人郷ヶ蔵乃
志あり乃ゆ妻也不り事とも也安藝国に落去
せしかハ首井の城を明て退きけり安田三河守惟
宗益信に降参を乞て嘉例の城回地の城を姫倉
吉寿乃友ハ一子千代猿を人質に出して降参を乞半
利岡の城を安芸守に掛けを明て吉良川へ落行兄
弾正と成り子孫しけり後に父紀伊国へ立退しとそ
聞へし世岡の城主甚兵衛甲斐守ヶ居城なりしか
此田城小川道靖方便となりして打出候子を取り
討絶しかハ西国の不知として姫倉の城を安藝守

を乃並ひ日々ら相戦て此城を被却して里の城を築
本居城後ニ香美郡十八人頭て乃並ニ移て安田因幡太平年
利の浦里奥山ニ籠り城ニ降参して手向ひする者の世
皆々是諸方へ下知を成し方ハ降参の者ニ三ヶ本
領ニ安堵せし甘井の城ニハ長宗我部美濃守へ
直ニ後ニ伊尾花美濃と云ハ甘井の某居を近年伊
尾喜と改め依て新庄の城ハ吉田太郎佐衛門乃
城を長宗我部の属さ乃並ひ後ニ手慰後出城を
安喜の居の城ハ香宗我部左近太夫親泰の城して
安藝ちと改るに其起りなるかの元ハ平原氏ニ敵
地なれより平所ニ出城して敵の往を定て名高る
本参とし其頃ハ八木伊典養明本山ニ出城して本
城を改て本山と称し本山式部少輔茂辰吉良殿へ
申し打て平穏ニの城して吉良式部少と名乗し長宗
我部左京進親貞吉良式部を討て其城を取り吉良
左京進と云し此例ニより親泰も安喜氏を改め
しと家臣ともに讃し取れて老臣池内肥前良て中
村ハ敵の旧本城を長宗我部を称し候に香宗我
部の旧家を継せずして旧本城ニ移て旧改の事旧
以ニ其の世として称しては他家の旧お後のらくと

内務省
内務省
国立公文書館 National Archives of Japan

今安藝に乃改むる時ハ香宗我部を断絶なさしめ
に同し然ハ乃襲父ハ不孝なり幸安藝を乃居に
付るへきに定め然者所謂安藝をも改めらるへきか
とや乃見れハ親泰諫に然るへしとて香宗我部安
藝守とて名乗乃田舎武者の如き氣なりしと乃え
なりしか阿へ都の事とかなり後に親泰阿波海
部の城を守り時香宗我部太郎盛親と共に城に
乃籠りしか後十市新吉郎も城を守り慶長五
年関ヶ原合戦ニ十市出陣して城を守りけり乃え
岩神右衛門ニ進安藝浦里の担奉行に城中を

支配させし以下にも志度にも拒絶して其の城を出せさりし
なり去程に畑山内蔵丞同右京兄弟ハ千寿丸を借
奉して阿波へ立籠り矢野備後守を頼て万一其事を
志し畠山ハ渡り乃より安藝一族皆亡び幕下の者
ハ皆元親に降参して一身を置に所なく野中三郎
左衛門に所縁の由緒ありけれハ野中に便りて元親へ
降参を畑山に伝しけれハ元親より内通ありけれハ親泰
畠山兄弟を安藝の城へ呼入れて詰腹を切らせ
乃ち畠山の家人ともは是を聞て一所に集り涙を流し
て諫しけれハ扨も兄弟乃人々謀せられて事無念

とらへ尽し家ありて乗て随ひける所に八富くしも八討出す
しかるに夫も安喜の城に押入親兼を討とりて持楼
をも焼せんとし三十六人神水を飲て出るを最後と思
定めて安喜の城を焼て向ひける親泰の先手人の向ふ
事を見べき所に皆をかわして八方に響きてこそ乗り入
て究竟の兵百人諸りとて是を防がせける三十六人
の者共ハ素より思ひ切たる事なれば切とて突けとて
事ともせず一足も退かず一人も残らず同じ枕に討
死せし城をも是非なく討死せり此由聞えし後進ぬ
けれバ元親あはれ剛の者かな一騎当千とも是等をこそ

いふべき也義有勇あり感嘆せられけるあまりあり定
霊を観て弔ひたまへ八百人づつ且は諸士の手本
にもなしめん為なれとて彼討死の場に三十六宛
の卒都婆を建られ其の僧を請じ弔ひ給ひしあり
難きそれよりして此所をば卒都婆が本とぞいひ
習はしける哀なりける事どもなり

土左物語巻第六終

明治九年十二月

鈴木安褒
奥田正志
校

内務省

明治九年十二月

遠田文志

鈴木至秀 校

国立公文書館
National Archives of Japan